

作物名：いちご
病害虫名：うどんこ病（病原：*Sphaerotheca aphanis*）



写真1 葉の病徴



写真2 果実の病徴

1 被害の特徴と診断のポイント

- 葉、葉柄、果実、果梗、つぼみに発生する。
- 植物体表面にクモ糸状のかびと白粉状物を形成する。症状が進展すると表面全体が白粉状物で覆われる。症状が激しい葉は上向きに巻いてくる。
- つぼみに発生すると花弁にアントシアンという色素を形成し、紫紅色に着色する。
- 本病によって株全体が枯死することはないが、果実に発生すると商品価値が失われるため、経済的被害となる。

2 伝染源・伝染方法

- 本病菌は糸状菌の一種で子のう菌類に属する。いちごの植物体上のみで世代が繰り返される。
- 分生子の飛散によって伝染が繰り返される。

3 発病しやすい条件

- 本病菌の分生子の発芽適温は 17～20℃であるが、0℃内外の低温に遭うと、かえって発芽がよくなる比較的低温性の菌である。分生子の形成適温は 15～18℃とされている。
- 発病に適した湿度の範囲は広く、80～100%で多発するが、43～80%でも発生しやすい。
- 高温期は病勢が停滞するが、この間は菌糸で潜伏して越冬し、気温が 20℃前後になると分生子を形成し伝染を繰り返す。

4 防除方法

- ほ場をよく見回り、発病葉や果実等はほ場外に持ち出して土中に埋めるなど適切に処分する。
- 本ほでは保温開始以降、ハウス内が多湿なりやすく発病に適した状態となるので、保温開始期は下葉の整理とあわせ薬剤散布を行うなど重点的に防除を実施する。また、罹病株を持ち込まないよう育苗期の防除を徹底する。
- 薬剤は発生初期のうちに散布し、主な発病部位である葉の裏面にしっかりと薬液が付着するよう十分な量の薬液をていねいに散布する。

5 その他

- 宮城県内では 2014 年に DMI 剤（トリフルミゾール剤）耐性菌の発生が確認されている。

（令和5年9月改訂）